

ルクソール神殿の聖舟祠堂における アレクサンドロスの肖像表現に関する一考察

中 村 友 代

はじめに

エジプトにあるルクソール神殿内には、アレクサンドロス大王（以下、アレクサンドロス）が修復したと伝えられる聖舟祠堂（バルク神殿）が現存する。この聖舟祠堂は今なお保存状態が良く、建造当時の建築構造や壁画装飾を確認することができる。本堂の壁にはエジプトのファラオの姿で表されたアレクサンドロスや、またヒエログリフによって彼の名が繰り返し刻まれており、従来の先行研究では彼が聖舟祠堂の修復にどの程度関わったのか、あるいはまた征服下にあったエジプトにおいて、彼がファラオとして認められていたのかといった点について議論がなされてきた。

本稿では、聖舟祠堂に表されたアレクサンドロスの肖像表現の特徴を検討することで、本堂の修復の経緯や、彼がファラオとして受容されていった経緯とその政治的・宗教的背景について考察を試みる。

聖舟祠堂（バルク神殿）修復の経緯と背景

まず、アレクサンドロスによって聖舟祠堂が修復された経緯とその背景について、情報を整理しておきたい。

紀元前334年春に東方遠征を開始したアレクサンドロスは、紀元前332年初冬にエジプトを無血占領した。当時のエジプトは、アレクサンドロスが現れる以前より既にアッシリアから、そしてその後はペルシアからの支配を受けていた。ペルシアによる支配に苦しんでいたエジプト人たちは、到着したアレクサンドロスを解放者として歓迎したと伝えられる¹。彼らはペルシア人を憎んでいたとされるが、その原因はとりわけ宗教上の理由であったらしい。ヘロドトスによると、当時エジプトを支配していたペルシア王カンビュセスは、聖牛アピスを傷つけて死に至らしめたため、その悪業の祟りでその後すぐに発狂したという²。

一方、アレクサンドロスはエジプトに到着すると古都メンフィスに入り、エジプトの神々、特に聖牛アピスに犠牲を捧げた³。メンフィスは古代エジプトにおける天地創造の神プタハの信仰と深いつながりがあり、彼が犠牲を捧げた聖牛アピスというのは、このプタハの化身とみなされていた。メンフィスがいかに重要な地であったかは、アレクサンドロスの遺体が最初にこの地へ運ばれたことから明らかである⁴。

歴史研究者の森谷公俊氏はカンピュセスが聖牛アピスを殺したという伝承の信憑性を疑い、このエピソードは彼を憎むエジプトの神官たちによる悪意ある創作であろうとみなしている。そしてアレクサンドロスが聖牛アピスに犠牲を捧げたことは、自分がこのペルシアの専制的な支配者とは異なる支配者であることをアピールする意図があったのではないかと推測している⁵。アレクサンドロスはエジプトに対して抑圧的な態度を取るのではなく、政治と宗教が密接に結び付いたエジプト特有のシステムの存続を認め、またこのシステムに適応する道を選択したのであった。メンフィスでの一連の儀式を終えたアレクサンドロスは、ファラオの重要な務めの一つである宗教建築物の保護や修復にも携わった。そのうちの 하나가、ルクソール神殿内にあった聖舟祠堂の修復である。

テーベ（現ルクソール）には、紀元前14世紀頃に当時のファラオであったアメンホテプ三世が建造した神殿があり、この神殿は現在ルクソール神殿という名称で知られている。本神殿は、北東に位置するカルナック神殿のアモン大神殿の付属神殿と位置付けられていた。アレクサンドロスはこの神殿の一部を修復し、その内部にあったアモン神の聖舟祠堂を修復した⁶（図1）。この場所にはもともとアモン神の聖舟とこの神の姿を象った神像が納められていたのだが、アレクサンドロスによって改修され、彼の姿や名前を刻んだ壁画もその際に表された。

アレクサンドロスが、エジプトの神々の中でもとりわけアモン神との密接な関係性を示すことを重要視していたことをうかがわせるエピソードとして最も良く知られるのは、シーワ・オアシスにあるアモン神殿への訪問だろう⁷。ヘロドトスによれば、ギリシア神話の英雄ヘラクレスは冒険の途中テーベにあるゼウス神殿を訪れ、ゼウスの姿を見たがった。しかしそれを望まなかったゼウスが雄羊の頭をかぶった姿で現れたことから、エジプト人はゼウスの神像を雄羊の頭を付けた姿で作るようになったと伝えられる⁸。こうしたエピソード等から、アモン神はギリシアのゼウス神と同一視され、美術上ではしばしばアモン神のシンボルである雄羊の角を伴うゼウス、「ゼウスーアモン」神が表された。アレクサンドロスはヘラクレスを自身の祖先として、またライバルとしても強く意識していたことから、エジプト滞在中にアモン神殿の訪問を希望したのでろう。アレクサンドロスはアモン神殿を参詣し、そして神官から「おお、我が子よ」と呼びかけられたことをきっかけに、自らを神の系譜に連なる特別な存在と信じ、そのように振舞うようになったと考えられている⁹。

聖舟祠堂の壁にはアレクサンドロスの名前と肖像が繰り返し表され、本堂がアレクサンドロスによって修復されたことを伝えている。また碑文の文言や壁画装飾の表現から推測すると、制作に際してはルクソール神殿の神官たちが少なからず携わっていたと考えられる。何故なら綿密に構成された碑文の文章や図像は、古代エジプトの宗教や美術に関する高度な専門的知識を必要とするからである。美術史研究者の A. Stewart は、実際には当時アレクサンドロスの会計監察官

(政府高官)であったクレオメネスが中心となり、さらに神殿全体を運営するアモン神殿の神官たちが少なからず関わって本堂の修復が行われたと推測する¹⁰。クレオメネスは周辺地域の税の徴収を任されていた人物であり、またアレクサンドリア建設の監督にも任命されていた¹¹。そしてまた一方で、アレクサンドロス自身が直接本堂の修復に携わった可能性は極めて低いと考えられる。何故ならアレクサンドロスがエジプトに滞在した期間はおよそ半年だけであり、その間にメンフィスやシーワ・オアシスを訪問し、さらにまた新都市アレクサンドリアの建造にも携わったと伝えられていることから、聖舟祠堂の修復を長期間にわたって指揮したとは考えにくいからである。

聖舟祠堂の壁画に表されたアレクサンドロス

聖舟祠堂は7.8m×5.7mの長方形を成し、南北から中に入る事が出来る(図2)。壁は砂岩で出来ており、また本堂の壁面は外壁、内壁ともに沈み込みの浅浮彫による装飾と多くの碑文によって豪華に飾られ、かつては鮮やかな色彩で彩られていた。

本堂壁面の浮彫には、一部が欠損しているものの、アレクサンドロスの肖像が少なくとも48回登場し、またその肖像はすべて典型的なエジプトのファラオの姿で表されている。アレクサンドロスは歴代のファラオたちと同様にエジプトの様々な神々と対峙しており、ある時は祈りを捧げ、またある時は奉納品を捧げ持っている。あるいはまた神によって手を引かれ、別の神のもとに誘導されている。K. Sheedy と B. Ockinga によれば、毎年行われるイペトの祝祭ではアレクサンドロスがファラオとして戴冠した儀式が再演され、その儀式の様子がこの聖舟祠堂の壁画に記録されているという¹²。

外壁の東面には、アレクサンドロスの肖像が18回、エジプトの神々が19回登場する。まずアレクサンドロスはハヤブサの頭をした神モンチュによって手を引いて導かれ、アモン＝ラーのもとへやってくる(図3)。以降の場面では、アモン＝ラーとアモン＝ラー＝カムテフに交互に対峙する様子が反復して表されている。アレクサンドロスは様々な形の冠を身に着けているが、東面では上エジプトを支配する王であることを示す、頭頂部に丸い突起がついた高さのある白冠を着用している。一方西面には、下エジプトの支配を象徴する、頭頂部が平らで後ろの部分が細く尖った赤冠を身に着けるアレクサンドロ

スの姿が認められる（図4左端）。身振りを持ち物は様々に異なり、両手を下におろしている場合は通常崇拜の身振りを示しており、また片手、あるいは両手を挙げている場合は、彫像やロータスの花束、パン等の供物を差し出したり、あるいは扉を閉める等の身振りをとっている。

外壁の西面ではアレクサンドロスがアトゥム神に導かれており（図4）、その他の場面では東面と同様にアモン＝ラーとアモン＝ラー＝カムテフと交互に対峙する。西面においても、やはりアレクサンドロスは18回、エジプトの神々が19回登場する。

外壁北面には碑文にアレクサンドロスの名前が出てくるものの、ひどく損傷しているために、彼の姿は確認出来ない。一方外壁の南面には、扉を挟んで両側に2体ずつ、合計4回のアレクサンドロスの肖像が神々と対峙する姿がスケッチによって記録されている（図5）。その下段にはアモン神との対面、上段には、どちらもテーベ周辺で信仰されていた二柱の女神ワセト（ウアセト）とイペトとの対面が表されている。この女神たちは、歴代のファラオたちとルクソール神殿の守護女神であった。

内壁は外壁と比較して、構図はほぼ同様でありながらも図像の数が少なく、一方登場する神やモチーフが多様で情報量が多い。東西の内壁にはアレクサンドロスの肖像がそれぞれ3回、神々は6回登場し、つまりアレクサンドロス一人に対し神が二柱一組で対峙する。東面 E205に表されたアレクサンドロスは、特徴的な頭飾りを身に着けている（図6）。彼はアモン＝ラーとコンストト神と対峙し、両手をおろし崇拜の身振りをとっている。彼はうろこ状の短いかつらをかぶって帯を巻き、そこからは雄羊の角が生えている。さらにその上には二重の鳥の羽が直立し、頭頂部には二匹の聖蛇を両側に伴った円盤が表されている。この冠は浮彫に表されたアレクサンドロスが着用する冠の中でもとりわけ特徴的なものの一つであり、冠を構成する太陽の円盤やダチョウの羽毛、雄羊の角等は、いずれもファラオの王権や神性と結びつく重要なアイテムである¹³。ダチョウの羽毛はアモン神やミン神らが身に着けて表されることで知られ、この冠を身に着けるアレクサンドロスと対峙するアモン神の頭上にも、同じように高く直立したダチョウの羽毛が二本認められ

る。雄羊がアモン神と結び付けられることは、既に述べた通りである。これと似た冠をかぶる雄羊の頭を伴ったアレクサンドロスの貨幣が知られており（図7）¹⁴、この印はこの貨幣を鑄造した鑄造所を特定するものとする解釈がある一方¹⁵、アモン神の息子としてのアレクサンドロスを示唆していると見なす研究者もいる¹⁶。この冠は、とりわけアモン神との密接な関係性を示すものと言えるだろう。

さらに外壁及び東西の内壁の浮彫下部には台石に施された浮彫装飾があり、その浮彫は神々が行進する様子が表されている。行列はいずれもアレクサンドロスが先導し、それぞれ上エジプトと下エジプトの各州（地区）の擬人像が捧げ物を持ってその後が続いている。東面の行列を先導するアレクサンドロスはやはり白冠を身に着け、（図8右端）、西面の行列を先導するアレクサンドロスは赤冠を身に着けている（図9左端）。

以上のように、アレクサンドロスはいずれの肖像も歴代のファラオの表現に倣って表され、いずれの場面においても神々に対し、祈りの身振りをするか、あるいはまた食べ物や香料等様々な奉納物を捧げている。その姿において重視されているのは、「冠」、「身振り」、そして「持ち物」である。これらの図像は精確に描き分けられてはいるものの定型化されており、宗教儀礼においてファラオとして果たすべき役割が記録されているに過ぎない。一方、肖像としての身体的特徴は失われ、その表現は画一的である。彼の名前を刻んだカルトウーシュを含む碑文と共に表されていなければ、私たちにはアレクサンドロスが表されているのかさえ分からない。アレクサンドロスの肖像は、通例武具あるいは衣装だけでなく、髪型等彼の身体的特徴にも関心が払われるが、そのような表現は本堂の浮彫にはなされなかった。浮彫に表された彼の肖像は、他のファラオと同様に、何よりもエジプトのファラオの地位と果たす

べき役割を可視化することが優先され、人物の特徴を表すこと、すなわち肖像性は重要ではなかったのである。

さらに周囲を取り囲むヒエログリフは、アレクサンダロスのエジプトのファラオとしての身分と功績を記録し、またそれを讀める役割を果たしている。すなわち聖舟祠堂の壁画は、図像とともに周囲に刻まれたヒエログリフと一緒に“読む”ことが出来る者が鑑賞者として想定されていた。

以上から、一連の図像や碑文は高度な専門的知識を持つ、おそらく神官たちによって選定されただろう。その選定に際して、おそらくはアレクサンドロスさえもほとんど介入しえなかった（しなかった）のではないだろうか。しかし一方で、アレクサンドロスは自身の肖像制作に関心を払っていたとも伝えられる¹⁷。アレクサンドロスが関わらなかったとするならば、どのような事情が想定しうるのだろうか。

ファラオとしてのアレクサンドロス

前332年に新たな支配者としてエジプトへやってきたアレクサンドロスは、滞在中アモン神殿への訪問やアレクサンドリアの建造等に携わり、そしてエジプトを去ると、二度とこの地に戻らなかった。一方神官をはじめ権力者たちは、従来の政治・宗教システムを維持するために、新たな支配者をエジプトのファラオとして迎え、次のファラオが現れるまでの間その治世を存続させる必要があった。伝統を重んじる彼らにとって、新たな支配者をファラオとして讀え表すことは必要なことであり、そのためには十分な時間も必要としただろう。しかし、実際のところアレクサンドロスがファラオとして奉られたという記録は、通称「偽カリステネス」によって著された『アレクサンドロス大王物語』の記述以外、現存史料には一つも残されていない¹⁸。歴史研究者の A. B. Bosworth はその理由として、アレクサンドロスがファラオとしての王権を自身の権利として当然のものと考え、土着の儀式を省略したのではないかと推測したが¹⁹、それはあくまでも推測に過ぎないと考える研究者も少なくない。確かにメンフィスでの犠牲式の様子が伝えられるのに対し、ファラオとしての戴冠という重要な出来事が記録されていないのは不自然であるように思われる。アレクサンドロスは戴冠式を行わなかったのだろうか、あるいは大王伝を記した歴史家たちが意図的に戴冠式の様子を記録しなかった（あるいは、できなかった）のだろうか。

Sheedy と Ockinga は、アレクサンドロスがファラオという伝統的な称号や、それにとらわれることに興味がなかったのかもしれないと推測する²⁰。この推測は聖舟祠堂の浮彫表現を考察する上でも興味深い。アレクサンドロスがアモン神との特別な結びつきを重視してきたことは既に述べた通りだが、確かに私たちは、彼がアモン神の息子と見なされることを望んでいたことと、ファラオとしてみなされることを、安易に結び付けていたのかもしれない。

アレクサンドロスのエジプトにおけるファラオとしての称号は、当初定まっておらず不規則であり、彼の正式な称号「ラーに選ばれし者、アモンに愛されし者」は、エジプトにおけるアレクサンドロスの治世4年目に初めて登場するという²¹。I. Shaw と P. Nicholson もまた、ルクソール神殿の浮彫とは対照的に、アレクサンドロス自らがエジプトの政治経済構造に何らかの影響を与える機会はほとんどなかったに違いなく、彼が去った後約10年間は、エジプトは支配者の不在に悩まされただろうと推測している²²。つまりアレクサンドロスがエジプトを去った後しばらく不安定な時期を経て、ファラオの存在を必要とする神官たちによって彼のファラオとしての地位が定着し、そして新たなエジプトの政治的宗教的基盤が整うに伴いこの称号が安定した形式を取るようになった、と考えられる。このことは、アレクサンドロス自身がエジプトのファラオとして見られることに関心を持っていなかったのではないかという推測とも合致するように思われる。

さらに歴史研究者の H. Bowden は、アレクサンドロスがアモン信仰の中心地であったテーベのアモン神殿ではなくシーワ・オアシスにあるアモン神殿を訪問したことについて、エジプト人に対してではなく、ギリシア人を意識して行われたのではないかと推測する。彼によれば、シーワにはギリシア都市キュレネからの祭礼使節が訪問していたが、キュレネではアモン神に対する祭祀が、アンモンあるいはゼウス・アンモンの名で行われていた。アレクサンドロスが、他にも複数あるアモン神殿と比べて辺境にあり、見劣りもするシーワのアモン神殿をわざわざ訪れた目的は、キュレネを含むキュレナイカ地方のギリシア諸都市を意識して行われたのではないかというのである²³。

アレクサンドロスがギリシア神話の英雄を意識し、アモン神との結びつきを欲したことはおそらく間違いないだろう。しかしこの行為が、エジプト人に対してエジプトの神との結びつきを示し、またそれによりファラオとしての資質を示そうとするものであったとは必ずしも言えないのではないだろうか。

おわりに

アレクサンドロスは、自身を「アモン神の血を引く新たなエジプトの支配者」として認められることを望み、一方エジプト人たちは新たな「ファラオ」の出現を望んでいたことから、双方の望みは一致していた。こうして、おそらくアレクサンドロスは聖舟祠堂の修復に際し、彼らに自身のファラオとしての肖像を表した浮彫制作をいわば「任せた」のではないだろうか。エジプトのファラオの美術表現においては既に長い伝統を持つ厳格な様式が確立されており、かつそれを踏襲することが求められていたからである。

聖舟祠堂の浮彫に見られる、エジプトのファラオとして表されたアレクサンドロスの肖像は、その制作にアレクサンドロスが直接関わっていた可能性が低いことをうかがわせる。しかしこの

ことは、アレクサンドロスがエジプトの神官たちにとって望ましい支配者であったことを否定するものではない。むしろエジプトの神官たちはアレクサンドロスを理想的な支配者の姿で表し讃えることが出来たことによって、彼ら独自の政治・宗教システムを維持することが出来た。そしてアレクサンドロスもまた反発を受けることなく既存のシステムに組み込まれ、エジプトの支配権を得ることが出来たのであった。こうしてアレクサンドロスは、エジプトにとっての良きファラオとして認められたのではないだろうか。

[附記]

本研究は、平成29年度科学研究費（若手研究B）による研究（17K13357「硬貨におけるアレクサンドロス大王の肖像研究—異民族への理解と配慮」、研究代表者：中村友代）、また平成30年度科学研究費による研究（18H03566「パルテノン彫刻研究—オリエント美術を背景とする再解釈の構築」、研究代表者：長田年弘教授）への研究協力による研究成果の一部です。調査に際しては筑波大学長田年弘教授をはじめ、「パルテノン彫刻研究」に関わる多くの研究者の方々にご指導を賜りました。また論文執筆に際しては、長田年弘教授と実践女子大学駒田亜紀子教授よりご指導を賜りました。お力添えを頂いたすべての皆様に、深く感謝申し上げます。

本稿の古代の文献表記は、Hornblower, S. and Spawforth, A. eds., *The Oxford Classical Dictionary 3rd ed.*, Oxford, 1996に基づく。

Abd el-Raziq, M., *Die Darstellungen und Texte des Sanktuars Alexanders des Großen im Tempel von Luxor*, Mainz, 1984.

Bosch-Puche, F., Alexander the Great's Egyptian Names in the Barque Shrine at Luxor Temple in: Grieb, V. and Nawotka K., eds., *Alexander the Great and Egypt: History, Art, Tradition*, Wiesbaden, 2014, 55-87.

Bosworth, A. B., *Conquest and Empire: The Reign of Alexander the Great*, Cambridge, 1988.

Bowden H., *Alexander the Great. A Very Short Introduction*, Oxford, 2014.

Curtius Rufus, Q., *HISTORIARUM ALEXANDRI MAGNI LIBRI QUI SUPERSUNT*.

Ἡρόδοτος. *Ιστορία*.

Lenormant, CH., *Numismatique des rois grecs: Trésor de numismatique et de glyptique*, Paris, 1849.

Müller, L., *Numismatique d'Alexandre le Grand: Suivie d'un appendice contenant les monnaies de Philippe II et III*, Copenhagen, 1855.

Pliny. *Naturalis Historia*.

Plutarch. *Vitae Parallelae*.

Pollitt, J. J., *The Art of Ancient Greece: Sources and Documents, 2nd ed*, Cambridge, 1990.

Pseudo-Kallisthenes. *Bios Alexandrou tou Makedonos*.

Shaw, I. and Nicholson, P., *The British Museum Dictionary of Ancient Egypt*, London, 2002.

Sheedy K. and Ockinga B., The Crowned Ram's Head on Coins of Alexander the Great and the Rule of Ptolemy as Satrap of Egypt in: Wheatley P. and Baynham E., eds., *East and West in the World Empire of Alexander. Essays in Honour of Brian Bosworth*, Oxford, 2015, 197-239.

Stewart, A., *Faces of Power: Alexander's Image and Hellenistic Politics*, California, 1993.

アッリアノス／大牟田章訳『アレクサンドロス大王東征記（上）』岩波書店、2001年
イアン・ショー／ポール・ニコルソン『大英博物館古代エジプト百科事典』原書房、1997年
クルティウス・ルフス／谷栄一郎他訳『アレクサンドロス大王伝』西洋古典叢書、2003年
伝カリステネス／橋本隆夫訳『アレクサンドロス大王物語』ちくま学芸文庫、2020年
ヒュー・ボーデン／佐藤昇訳『アレクサンドロス大王』刀水書房、2019年
プルタルコス／森谷公俊訳・註『新訳アレクサンドロス大王伝』河出書房新社、2017年
ヘロドトス／松平千秋訳『歴史上』岩波書店、1971年
森谷公俊『興亡の世界史 第01巻アレクサンドロスの征服と神話』講談社、2007年

注

- 1 Arr. *Anab.* 3. 1.
- 2 Hdt. 3. 27-30.
- 3 Arr. *Anab.* 3. 1.
- 4 Curt. 10. 10. 20はアレクサンドロスの遺体がまずメンフィスに運ばれ、さらにその数年後にはアレクサンドリアに移されたと伝えている。
- 5 森谷 2007年、153-154頁。
- 6 聖舟祠堂の浮彫と碑文については Abd el-Raziq 1984を参照。本稿における本堂の図版番号や人名・名称の表記は本書に準ずる。また聖舟祠堂については、Shaw and Nicholson 2002, 48-49も参照。
- 7 Plut. *Vit. Alex.*, 27.
- 8 Hdt. 2. 42.
- 9 Plut. *Vit. Alex.*, 27.
- 10 Stewart 1993, 175.
- 11 Arr. *Anab.* 3. 5.
- 12 Sheedy and Ockinga., 2015, 234.
- 13 カルナック神殿のアモン神に捧げられた神殿浮彫には、アレクサンドロスの異母兄弟フィリッポス三世アッリダイオスもまたこれと同じ冠を身に着けた姿で表されている。
- 14 アレクサンドロスの死後直後に、プトレマイオス一世によって鑄造されたテトラドラクマ貨幣で、メンフィスで鑄造された可能性が指摘されている。Sheedy and Ockinga., 2015, 199.
- 15 Müller, 1855, 319-320.
- 16 Lenormant, 1849, 22.
- 17 Plin. *HN.*, 7, 125によれば、「アレクサンドロスはまた、アペレス以外何人も彼の絵画を描いてはならない、ピュルゴテレス以外何人も彼の彫像を作ってはならない、そしてリュシッポス以外何人も彼のブロンズ像を作ってはいけないという布告を発した」（Pollitt 1990, 217に基づく拙訳）。
- 18 Pseudo-Callisthenes, 1. 34.
- 19 Bosworth., 1988, 71.
- 20 Sheedy and Ockinga., 2015, 232-233.
- 21 森谷 2007年、155-156頁。
- 22 Shaw and Nicholson., 2002, 23-24.
- 23 Bowden H., 2014, 61.

